ものづくりの原点「手技」の世界

伝統と経験に培われた手技によって生まれる日本の美しい工芸品。ものづくりの原点である手技の世界を、職人の工房に訪ねました。

曲げわっぱ

秋田県

すらりと筋の通った縞模様の木目がなんとも美しい。それもそのはず、使用する木は厳しい自然に耐えてきた良質の天然秋田杉。細かくて真っすぐな木目は弾力と強さの証だ。そんな頑丈な無垢の板を手で曲げて、弁当箱やおひつなどの容器をつくる伝統工芸が曲げわっぱだ。

大館城主・佐竹西家が下級武士の内職として奨励し、産業として定着した。濃い赤と淡い黄色が織りなす杉の木目が活かされ、シンプルで気品のある味わいは現代の感覚にもマッチする

良材とはいえ、自然の素材は均質ではない。一枚一枚、板の性格は異なるし、一枚の板でも、よく曲がる部分とそうでないところがある。しかも、両端を薄く削ってあるから、全体をきっちり丸く仕上げるのは容易ではない。時には折れることだってある。素材の性質に合わせて板を曲げることが肝心だ。

ぐつぐつと煮え立つ熱湯の中から曲げわっぱ職人の栗盛俊二さんが細長い板を取り出した。まずは木を曲げるためのコロと呼ばれる道具でおよその形をつける。それから栗盛さんはぐっと板を押さえ込むように曲げた。すると、手品を見ているかのように板は見事な円に。この作業を繰り返し1時間に100本以上を曲げていく。黙々と曲げる栗盛さんの手から、白木の大輪の花がつぎつぎと咲いていった。

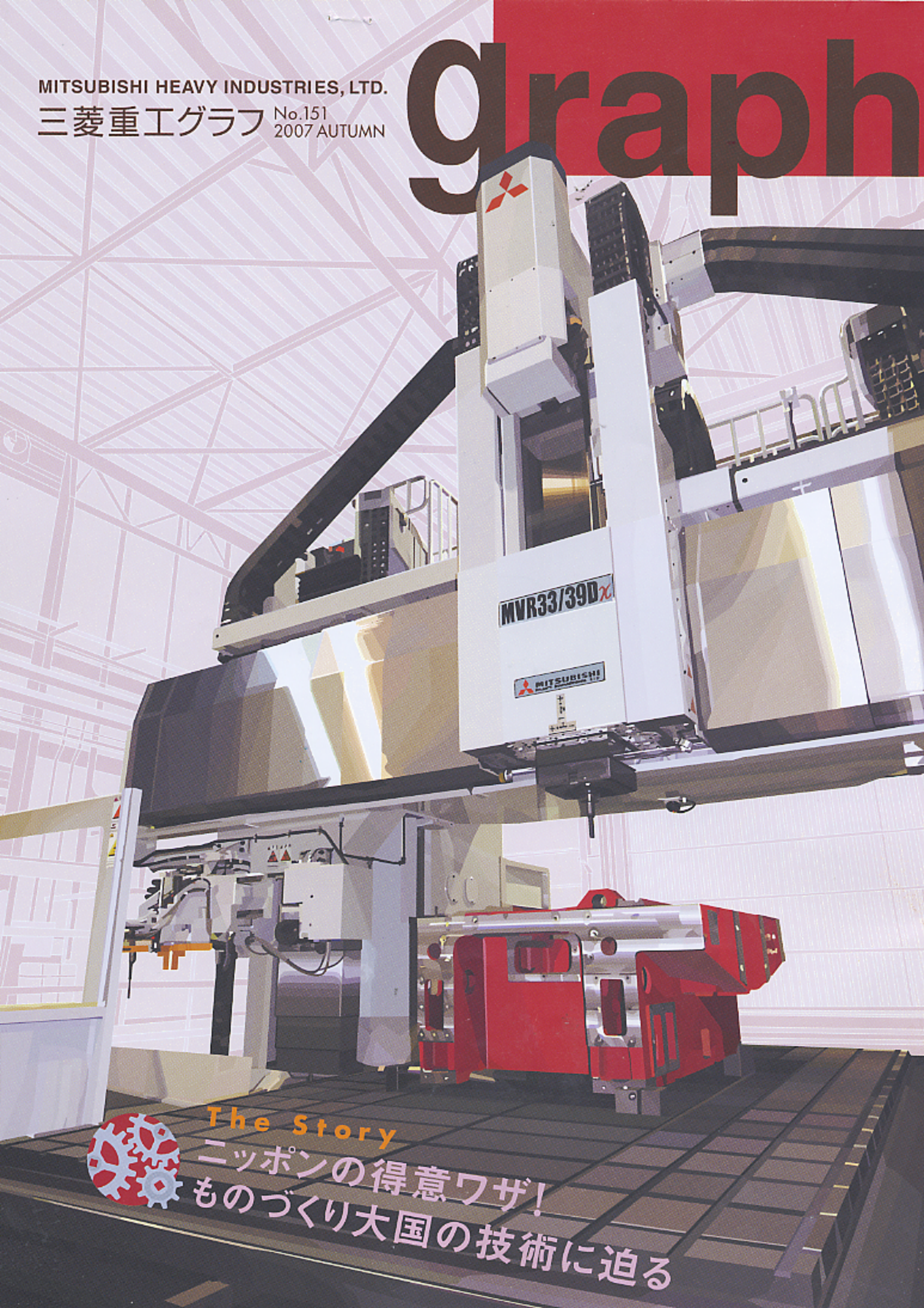
熱湯から取り出した板をコロに巻きつけて丸みを出しているところ

桜の樹皮を使って接合部を縫い留める「樺（かば）縫い」をする

曲げる

MITSUBISHI HEAVY INDUSTRIES, LTD.
三菱重工グラフ No.151
2007 AUTUMN

graph



The Story

ニッポンの得意ワザ！ ものづくり大国の技術に迫る